

● 視点アジア



バンコクのチャイナタウン市場で

売られていた中国製マスクの山＝8月下旬

[分かち合う世界へ]34、ウイルス対策 正念場にアジア自立支援機構代表理事・小沼廣幸

若い頃のように無理がきかなくなったせいだろうか。7月にタイ北部チェンライの山岳民族支援プロジェクト視察を終え、続いてタイ南部トラングのサゴヤシ林やジュゴン保護地域に日本の取材チームを案内し、バンコクに戻った直後、締め付けるような頭痛と微熱が数日間続いた。

以前アフリカで感染した卵形マラリアの症状によく似ていた。マラリアというと高熱で苦しむイメージを浮かべがちだが幾つかの種類がある。卵形マラリアは、高熱は出な

いが締め付けられるような頭痛の症状が現れる。薬を飲み、数日我慢すると大抵は治る。しかし完治したつもりでも一度かかるとウイルスが体内にすみ着き、体調が悪い時や疲労時に症状が再発することがある。今回も多分それではないかと思い、おとなしくしていれば治るだろうと楽観していたが、微熱が治まらず頭痛が続き、そのうち少し動き回ると息苦しくなってきた。

これは何か違うな、もしかしたら新型コロナウイルスかな、という思いが頭をよぎり、バンコク市内にあるかかりつけの病院の呼吸器科で診察を受けた。検査の結果、感染症か、あるいは別の理由で心臓を取り巻く心膜に水がたまり、急性心膜炎を起こしていると診断された。即日入院となり、翌朝、手術で1・5リットルほどの水が取り除かれた。この心膜にたまった水が左の肺の下方半分を押しつぶしたために呼吸能力が低下していたとのことだった。

新型コロナのPCR検査を2回、マラリア、デング熱、結核、がんなど種々の検査結果がすべて陰性でホッとしたものの、結局、原因は不明だった。医者によると、この病気の8割くらいが感染症によるもので、そのうち3割以上が原因不明か未知のウイルスによるものだそうだ。

その後、感染も治癒し、押しつぶされていた肺も復元して機能を取り戻し、入院10日後の8月初旬に退院した。現在は完治して通常の生活に戻っている。同月中旬からタイの国立大学の新学期が始まった。世界の食や農業、持続可能な世界の重要共通課題(SDGs)などを、英語のオンライン遠隔授業でタイ人の学生に講義している。

タイ国内での新型コロナ新規感染者は、ゼロに近い状態を2カ月以上維持しているが、タイ政府は非常事態宣言を9月末まで延長した。過去、多くの感染症は夏に鎮静化して、11、12月ごろに、より狂暴に変異して第2波、第3波を起こし、多くの死者や重大な被害をもたらしている。

本当は今が正念場なのだ。過去の経験から確実に学び、間違いや失敗は謙虚に反省すべきだ。誰もが未知の事態に遭遇し、皆が試行錯誤している。重要なのは臨機応変な政策変更や軌道修正ができる柔軟性、それを受け入れる寛容性だ。間違いを批判するばかりでなく、全員が支え合い、一団となったチームワークが今求められている。

<こぬま・ひろゆき> 1953年、東京都生まれ。明治大卒。筑波大大学院博士課程前期修了。博士(農学)。元国連食糧農業機関(FAO)事務局長補兼アジア太平洋局長。2017年にタイ王冠勳章を受章。18年、一般社団法人(非営利)アジア自立支援機構を設立。両親、妻は本県出身。茨城県、バンコク在住。

2020/09/06 15:0